

文化・芸術

「蓮と太陽」

1938(39)年ごろ、墨・紙
83・5センチ×52・0センチ (個人蔵)

鬚光 (1907(46)年)

光を自在な点描風に、墨の筆触によってとらえています。放射状の広がり美しい一点です。本作は、鬚光の代表作「眼のある風景」(1938年・東京国立近代美術館蔵)と同年代に描かれた作とされます。また、同時期には、鳥と牙コゼをより深い濃淡で表現した6歳を超える「素描絵巻」(同美術館蔵)がありますが、ともに、同じ朱の丸印が押されています(本名・石村日郎の「石」)。

ゴッホ的な造形性、また、この時代の美術界における若い画家たちによる日本的なものへの回帰との関連が指摘されてきた一点です。

38(39)年ごろの鬚光の紙上の表現は、墨やグワッシュなど、さまざまな画材を併用し、新たな感覚が盛り込まれた作風が展開されました。一方、丸木位里をはじめ船田玉樹、奥田元宋ら郷里・広島の日本画家たちとの交流も深めていった時代でした。ともに広島で展覧会を開催するため、鬚光は頻繁に郷里・広島を行き来しています。

本作は、広島風景をモチーフとしていたでしょうか。鬚光の湧き出る創作熱の源泉をみるようです。
(小此木)

〈名画の扉〉

大川美術館企画展から

